沼津市歴史民俗資料館

資料館だより

Vol.47 No.2（通巻235号）

2022.9.25（年4回発行）

浮世絵版画に描かれた黄瀬川亀鶴『東海道一ト眼千両　沼津』

東海道一ト眼千両

沼津　黄瀬川亀鶴

黄瀬川石田村の東に有　亀鶴ハ
建久の頃の遊君　兄弟仇を復ふ
歟　祐経が仮屋に居合せこれを
手引きして本意を達するを喜し
後尼となりて一寺を建て亀鶴山
観音寺と号し　今尚存せり

山々亭有人記

人物　国周筆　　風景　広重筆

木瀬川　潮音寺　亀鶴之石碑　元禄10年（1697）

『吾妻鏡』によれば、建久４年（1193）５月、源頼朝は富士野に於いて大規模な巻狩りを催しました。この時に狩宿での酒宴には、手越・黄瀬川以下近隣の遊女を群集させたとあります

28日の小雨降る夜、有力御家人工藤祐経の宿舎に、曽我十郎・五郎の兄弟が討ち入り、父河津三郎祐泰の仇討ちを果たしました。同席していた手越少将・黄瀬川の亀鶴等が大きな叫び声を上げ、曽我兄弟も父の仇討ちであることを声高々に叫んだため、大混乱となり、多くの人が傷を被ることとなりました。十郎は仁田忠常に討たれ、五郎は頼朝の宿舎に至り、捕らえられます。手越少将や亀鶴等はその後尋問を受け、その夜の子細を問われたとあります。

この出来事は曽我兄弟の仇討ちとして広く知られ、脚色されて「曽我物」として歌舞伎などで上演され、亀鶴は討ち入りの手引きをし、大声を出してその場を混乱させ仇討ち成就を助けた人物としてとして描かれています。

亀鶴所縁の亀鶴山観音寺は廃寺となり、亀鶴が信仰したと伝える観音菩薩は潮音寺に移されました。この時代に黄瀬川宿が栄えていたことを今に伝えています。

駿河湾の漁

川口　洋司さんの漁話

ヨナワ（メカジキの延縄漁）　その２

ミチイト（幹縄）につけるエダ（枝縄）は、ナイロン製の撚り縄にヨリカン（撚り戻し・サルカン）をつけ、その先を鋼製のワイヤーでつなぎ、最後に餌をつけるためのツリ（釣針）がつきます（図１）。ツリにつながる糸は、細い方が魚の掛かりが良くなるのですが、ナイロン製で強度を求めると太くならざるを得ません。そのため、ツリにつながる糸は細くても強度のあるワイヤーを使用しています。また、メカジキがツリに掛かると逃げようとして暴れることがあるため、暴れた時に上あごから角のように伸びるハス（吻）がエダに当たっても切られないようにする目的もあります。一方、エダ全体をワイヤーにしてしまうとワイヤーは硬く取り回しが行いにくいため、このようにエダには２種類の素材を使い分けています。

ツリには、餌としてサンマ・サバ・イカ一匹そのままをツリに掛けます。あらかじめ、冷凍のサンマなどを購入しておき、漁場につくまでに溶かしておきます。魚をツリに掛ける時は釣針を口から入れ上方に貫くようにします。魚の上方は硬く、一度ツリが硬い部分を貫くとツリが外れにくくなります。

ヨナワは真夜中に行う漁です。漁場となる田子沖周辺への往復の航行時間と操業時間を計算して早朝に行われる沼津魚市場の競りに間に合うように出漁します。そのため、出漁時間は大体夕方頃となります。最長で６㎞ほどの長さになる延縄を田子沖から石花海の北側の浅堆であるウラノセに向かって東から西へと延縄を仕掛けていきます。まず、はじめに延縄の端に浮子のついた旗であるボンデン竿（写真２）をつけて海に落とします。そして、船を走らせながらミチイトやエダを落としていきます。エダを落とす時には先端のツリに餌を掛けます。ひと籠分120尋（約200ｍ）のミチイトを海に投じ終わるとボンデン竿をミチイトにつけて海に投じます。そして、そのままつながっている次の籠のミチイトやエダを落としていき、又ひと籠分が終わるとボンデン竿をミチイトにつけて落としていきます。これを繰り返していきます。ボンデン竿は仕掛けた場所の目印となるもので、ひと籠分のミチイト毎にボンデン竿をつけておくことでミチイトが途中で切れて流されてしまった場合でも見つけることができるようにしています。延縄を仕掛け終わるまでには１時間ほどを要します。そして、仕掛け終わった場所で餌への食いつきを待っている間に夕飯をとります。

一服後、頃合いを見て待機していたウラノセ側から田子の方へ向かって船を走らせながらラインホーラー（巻き上げ機）で延縄の仕掛けを揚げていきます。全くメカジキが掛からない時もありますが、掛かる時は15本ぐらい掛かることもあります。メカジキが掛かっていた場合、頭や鰓など傷をつけても商品価値が下がらない場所にカギを掛け、角のように伸びたハスを持って甲板に曳き揚げます。揚げると木槌で２，３度殴って弱らせてからハスを切り落とし、万が一メカジキが暴れても大丈夫なようにしておきます。メカジキは短期間であればカメ（魚艙）に入れておかなくても、身がヤケる（身が熱によって劣化する）ことがないので、甲板に並べたままにしておきます。全ての延縄を曳き揚げ終わると沼津漁港へ向かい、魚市場で競りに掛けられます。

（話：川口洋司氏　昭和17年生まれ　沼津市獅子浜在住）

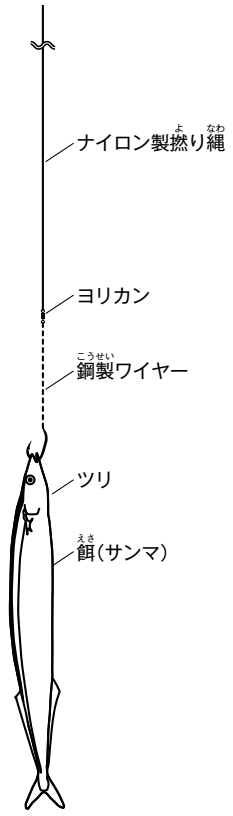

図１：ヨナワのエダ

写真１：ヨナワで使うツリ
釣針縦66㎜×横34㎜

写真２：ボンデン竿
竿長3495㎜×直径21㎜
旗縦360㎜×横315㎜

資料は全て歴史民俗資料館所蔵

『ふるさと沼津覚書』

加藤　雅功

■香貫・我入道編 その６　下香貫塩場の新田開発

●善太夫新田と塩場　現在国道414号バイパスとして、大平地区へとトンネルで抜ける新道工事と沿道の整備が着々と進められている。「善太夫」の旧字前原（現下香貫前原）付近から分岐する新ルートであるが、一帯は江戸前期からの新田開発の対象地であった。ただし低湿な沼沢地の一般的な干拓ではなく、また排水路の整備による新田でもない。善太夫新田は用水路・排水路の両方を整備している点に特徴がある。

大正期に作成された『駿東郡楊原村全図』は精密な描画で、様々な情報が得られる。前原付近では方格状の田地に用水路と道が整備され、計画性が読み取れる。一方、東南部の塚田川に接する字子ノ起は「安政の大地震」による震災で田地が沈み込んだ跡地である。窪地が池となった「蓮池」から後に用水を得ることとなるが、用排水の分離は当初なかった。その後通称「二つ屋」付近の道路を堤にして干拓地的な様相を呈するに至る。

善太夫新田地籍の分布の特異性として、その対象地が排水不良地ではなく、塚田川・新川の北側に当たり、近世前期の切添とは異なるが新開地として、周辺部の土地を所有して開墾したことにある。

元禄５年（1692）の絵図に描かれていた「水除土堤」との関係でも、文政11年（1828）の絵図ではその堤防背後に塩場集落が立地しており、洪水被害が弱まって安定化した後に居住を開始した状況が見てとれる。

「善太夫新田」の小字分布を見ると、塩場集落（字塩場）や西原のほか、前原・藤井原・樋ノ口・子ノ起・二貫地と、その他大朝神社境内地の山宮前・フケ・島郷の桃郷林などの飛び地がある。当然「塩場」の地に戸田善太夫（旧姓）が居住し、入浜式の塩田を開発する試みは、東南側の開発予定地に向けて実施されることとなった。干満利用の「干潟浜」方式か、前面に砂礫州があり「内潟浜」方式の導入が考えられる。

その点からも『楊原村沿革誌』などで主張する、狩野川河口の低湿地化した旧河道を塩浜にしたという見方は否定する。仮に狩野川が流れ込んでいたならば、湖沼ないし沼沢地を埋めたとしても、海に河口が向かわない。

新田開発の対象地が決して南北方向ではなく、「善太夫新田」では北西から南東にかけて広い点のほか、「浜新田」の字山宮前・字浜田・字柿原などの低湿地部分に対して、その閉塞された旧沼沢地に対する隣接地であり、あくまでも北寄り側に「善太夫新田」の開発対象地が限定される点とからである。

●開発の目論見　土地条件からも「入浜式」の塩田開発の可能性と塩場集落ならびに「善太夫新田」の関係は、古文書からもその経緯を知ることができる。寛永６年（1629）の古文書で、川端善太夫が当地に居住を開始し、塩浜開発する際、寛永10年（1633）から年貢で塩100石を納めることが取り決められた。

しかし寛永10年に発生した地震によって「塩浜」が破損し、塩浜年貢の上納が不可能となってしまった。川端文書によれば、代官からは塩浜に固執せず、田地に切り替えて年貢を納めるように促し、塩浜を自由に田畑とすることが許されている。この経緯から「内潟浜」方式の導入が検討されたものと思われる。

その後川端善太夫が新田開発を進めた結果、安永６年（1777）の郷村の１つにその名を冠した善太夫新田がある。「天保郷帳」での石高は117石余で、弘化４年から安政３年の間に書かれた「郡村高帳」でも115石余で、家数４となっていた。当初の塩場の目論見は外れたが、塩田ではなく田地としては排水不良地であり、深刻な問題を抱えてしまった。三願寺通り（字三貫地）に向けて「塩場水門」の石水門を築き、北に流れる「江川」へ出水時に悪水を吐き出すほか、「浜新田」と「善太夫新田」を対象として洪水と汐除の目的で、天和２年（1682）に「中堤」の長さ176間の中土手を石水門とともに築いて維持・管理している。

下香貫の「水除土堤」から塩場が転訛した塩場を経て牛臥の中堤（中土手）に至るが、江川・新川からの塩場水門前には「吸い干し」があり、北側にもかつてあった。「中堤」は元禄期の「古湊水門土手」で、我入道分の字山宮前の排水不良地、「浜新田」に対する浜水門（旧古湊水門）と直結する。初期は水門付近のみで、後に西側へ洪水と高潮除けの中土手で延長した。中堤（汐除堤）は松並木を成しており、今も松の残るランドマークで中央に道が走る。法面に松が生える堅固な堤防であり、細長い西半分は下香貫分の飛び地となっている。

下香貫の代表的な２つの新田開発は狩野川の旧河口や旧河道ではなかったが、塚田川の浜水門に象徴されるように、塚田川河口の閉塞と感潮河川故の日常的な逆流と

善太夫西原の金毘羅神社　塩場集落南西部裏鬼門の位置
（燈明台は大正３年献灯 塩場連中）

の関係から、元禄５年（1692）の絵図には排水のための「悪水払い」用に２ケ所の圦（樋門）が中堤の南側に設けられていた。北側への排水を江川側の塩場水門（旧古湊水門）に委ねたように、狩野川の洪水の出水対策だけはない、汐除の苦労が滲んでいる。さらに善太夫新田の地籍は香貫用水の末端であり、一方では湿田も多く、日照りによる旱害の日損田と湿田との二重苦というように、不利な状況がその後も引き続き発生している。

沼津の歴史点描１　牛臥三島館を訪れた人々

①新渡戸稲造

『新渡戸稲造事典』によれば新渡戸稲造は、札幌農学校の教授を務めていた明治31年（1898）１月13日から転地療養のために三島館に５月末まで約４カ月半の期間滞在したとあります。稲造は文久２年（1862）盛岡の生まれですから36歳の時のことです。

明治24年（1891）に札幌農学校の教授として赴任するも、明治30年（1897）多忙な教授生活でアメリカから連れ添ったメアリー夫人と共に体調を崩し、群馬県伊香保やカリフォルニアで転地療養しますが、その間に牛臥の三島館に滞在しました。この頃に農学校の教授を退官したようです。

新渡戸に牛臥三島館での療養を勧めたのはお雇い外国人の一人であり、沼津御用邸や皇族方とも深い関りがあるドイツ人のベルツ医師という説もありますが、彼の残した日記にはこの時期の記述がないため、確証は得られません。

新渡戸が、昭和４年（1929）６月13日、札幌農学校の同窓生として繋がりを持つ、幕臣の子息で沼津兵学校付属小学校に学んだ渡瀬虎次郎の遺族が、その遺志により西浦久連に設立した興農学園の開校式に出席し、クラーク博士の「ボーイズビアンビシャス（少年よ大志を抱け）」の言葉を揮毫したことは、現物が興農学園に残されていたことで知られています。この書は北海道大学に寄贈されると共に複製が市内の小学校に配られて、掲げられています。

渡瀬は沼津兵学校付属小学校の出身で札幌農学校の第一期生としてクラーク博士の教えを直接受けましたが、新渡戸は二期生で、既に入学時にはクラーク博士は帰国していました。新渡戸の同期生には内村鑑三もおり、彼もここでキリスト教の洗礼を受けています。

資料館からのお知らせ

夏休み体験コーナーについて

夏休みの企画として、土･日曜日に、随時にですが、玄関ピロティに於いて体験コーナーとして火起こし体験を実施しました。

コロナ禍の中、三密を避けることが可能な体験として選んだもので、火打ち金と火打石による火起こしと舞錐による火おこしを行いました。

舞錐を使っての火起こしでは、火種から炎を立てることが難しかったようです。

火打ち金と火打石による火起こし体験の様子

歴民講座の開催について

コロナ禍の中、２カ年にわたり中止せざるを得なかった歴民講座を本年度は、下記の通り開催する予定です。事前予約制となります。応募方法は改めて『広報ぬまづ』でお知らせいたします。

開催期日　令和４年12月17日（土曜日）
演　　題　水軍から見た戦国期の駿河湾と沼津と
講　　師　小川　雄
会　　場　沼津市立図書館４Ｆ 視聴覚ホール

沼津市歴史民俗資料館だより

2022.9.25 発行　Vol.47　No.2（通巻235号）
編集･発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1
沼津御用邸記念公園内
沼津市歴史民俗資料館　TEL 055-932-6266
FAX 055-934-2436
URL:https://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm
E-mail:cul-rekimin@city.numazu.lg.jp